経済・金融フラッシュ

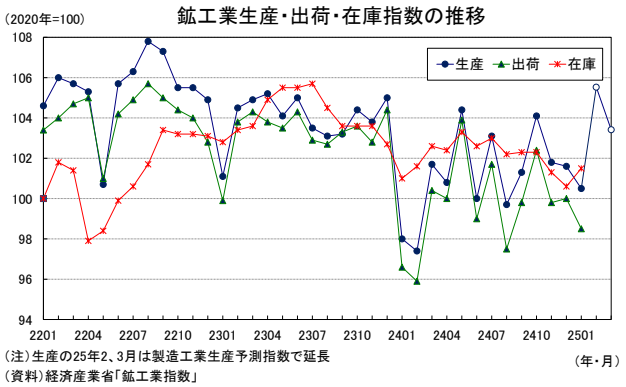
鉱工業生産 25 年 1 月－電子部品・デバイスは在庫調整局面へ

経済研究部　経済調査部長　斎藤　太郎
TEL:03-3512-1836　E-mail: tsaito@nli-research.co.jp

1. 1 月の生産は 3 ヵ月連続で低下

経済産業省が 2 月 28 日に公表した鉱工業指数によると、25 年 1 月の鉱工業生産指数は前月比▲1.1%（12 月：同▲0.2%）と 3 ヵ月連続で低下し、ほぼ事前の市場予想（QUICK 集計：前月比▲1.2%、当社予想は同▲0.7%）通りの結果となった。出荷指数は前月比▲1.5%と 2 ヵ月ぶりの低下、在庫指数は前月比 0.9%と 4 ヵ月ぶりの上昇となった。

1 月の生産を業種別に見ると、自動車は前月比 6.9%と 3 ヵ月ぶりに上昇したが、半導体製造装置等の生産用機械が同▲12.3%と急速に落ち込んだほか、在庫調整局面に入りつつある電子部品・デバイスが同▲5.4%と大きく落ち込んだ。



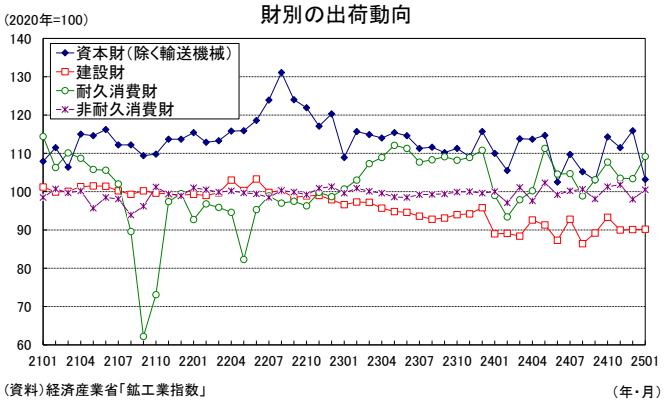
(注)生産の25年2、3月は製造工業生産予測指数で延長
(資料)経済産業省「鉱工業指数」

財別の出荷動向を見ると、設備投資のうち機械投資の一致指標である資本財出荷指数（除く輸送機械）は 24 年 10-12 月期の前期比 7.5%の後、25 年 1 月は前月比▲11.0%となった。また、建設投資の一致指標である建設財出荷指数は 24 年 10-12 月期の前期比 1.8%の後、25 年 1 月は前月比 0.1%となった。

ＧＤＰ統計の設備投資は 24 年 7-9 月期の前期比▲0.1%の後、10-12 月期は同 0.5%と 2 四半期ぶりに増加した。ＧＤＰ統計の設備投資は一進一退となっているが、高水準の企業収益を背景に基調としては持ち直しの動きが続いていると判断される。

消費財出荷指数は 24 年 10-12 月期の前期比 1.9%の後、25 年 1 月は前月比 1.9%となった。耐久消費財が前月比 5.6%（10-12 月期：前期比 2.6%）、非耐久消費財が前月比 2.6%（10-12 月期：前期比 0.8%）となった。

ＧＤＰ統計の民間消費は、24 年 4-6 月期、7-9 月期に前期比 0.7%と高めの伸びとなった後、



(資料)経済産業省「鉱工業指数」

 Copyright ©2025 NLI Research Institute All rights reserved

10-12 月期は同 0.1%と低い伸びにとどまった。物価高の悪影響が続く中、所得税・住民税減税の効果一巡が消費の伸びを抑えた。25 年 1 月の消費財出荷指数は堅調だったが、その他の消費関連指標はそれほど強くない。25 年 1 月の消費者物価（総合）は米や生鮮食品の高騰もあり前年比 4.0%と 2 年ぶりの 4%台となった。冬のボーナスが大幅増加となったことは好材料だが、物価の上昇ペース加速が消費の抑制につながっている。消費の持ち直しは当分緩やかにとどまる可能性が高い。

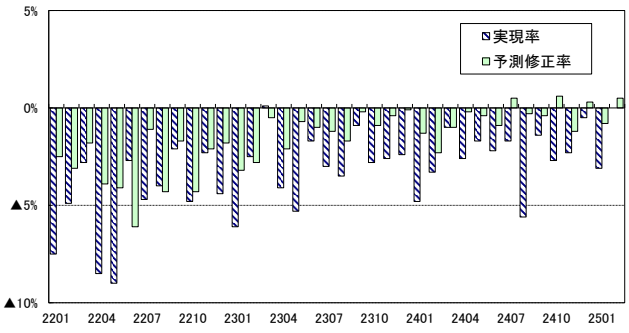
2. 電子部品・デバイスは在庫調整局面入り

製造工業生産予測指数は、25 年 2 月が前月比 5.0%、3 月が同▲2.0%となった。生産計画の修正状況を示す実現率（1 月）、予測修正率（2 月）はそれぞれ▲3.1%、0.5%であった。

予測指数を業種別にみると、1 月に大きく落ち込んだ生産用機械、電子部品・デバイスは 2 月はそれぞれ前月比 14.0%、同 9.7%の大幅増産計画となっている。しかし、1 月の実現率がそれぞれ▲6.8%、▲12.8%の大幅マイナスとなっていることを踏まえれば、実際の生産は大きく下振れる可能性が高い。また、1 月に前月比 9.1%の高い伸びとなった輸送機械は 2 月が前月比 0.4%、3 月が同▲4.1%と弱めの計画となっている。

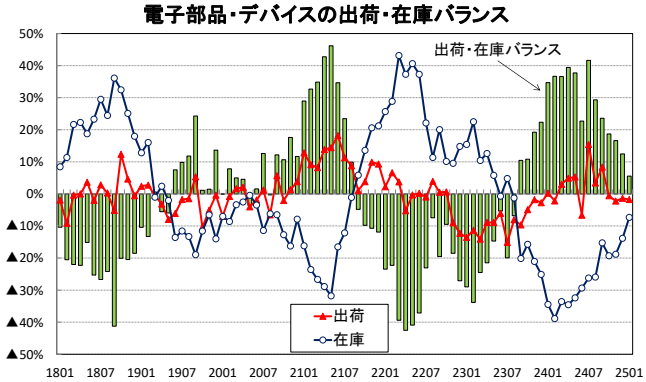
25 年 2 月の電子部品・デバイスの出荷・在庫バランス（出荷・前年比－在庫・前年比）は 5.6%（12 月：12.5%）と 17 ヵ月連続のプラスとなったが、プラス幅は 7 月の 41.7%をピークに 6 ヵ月連続で縮小した。1 月は出荷が前年比▲1.8%（12 月：同▲1.4%）とマイナス幅が拡大する一方、在庫が前年比▲7.3%（12 月：▲13.8%）とマイナス幅が縮小した。電子部品・デバイスは在庫調整局面入りしている可能性が高い。

最近の実現率、予測修正率の推移



（資料）経済産業省「製造工業生産予測指数」

電子部品・デバイスの出荷・在庫バランス



（注）出荷・在庫バランス＝出荷・前年比－在庫・前年比　（資料）経済産業省「鉱工業指数」

25 年 1 月の生産指数を 2、3 月の予測指数で先延ばしすると、25 年 1-3 月期の生産は前期比 0.6%となるが、実際の生産の伸びが計画を下回る傾向があることを考慮すると、1-3 月期は 2 四半期ぶりの減産となる可能性もある。

鉱工業生産は増産と減産を繰り返しており、22 年以降は 2 四半期続けて増産となったことがない。生産の牽引役となっていた電子部品・デバイスが調整局面に入る中、輸出の低迷が続く可能性が高いことから、鉱工業生産は当面、一進一退の動きが続くことが予想される。

本資料記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と完全性を保証するものではありません。
また、本資料は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。